組織行動研究

No. 17

編集後記にかえて

●人にはさまざまな“個性”がある。上品でセンスある人，無口で常識豊かな人，中途半端の嫌いな人，愛嬌あふれる人，静かで控え目な人……，この世界に一人として同じ人間はいない。

一人一人が皆“個性”的であるのと同様に，そうした“個性”的な人間が書く文字も，また，実に“個性”的である。正月，年賀状を手にしたとき，差し出し人を見なくとも，それが誰からのものか当てられることも多い。これも皆各自の個性が筆跡に表出されているからにほかならない。

このような筆跡とパーソナリティの関連については昔から，多くの人によって語られてきた。しかし，何らかの形で学問の対象として扱われるようになったのは，まだ百年来のことであり，本格的な実証的研究ということになれば，数十年のことである。

●著者は元来，パーソナリティを研究している心理学徒であり，別に筆跡の専門家ではない。その著者が性格（気質）と筆跡の対応関係に気付いたのはＳＣＴ（Sentence Completion Test，文章完成法）によるパーソナリティ診断を行っている過程でのことである。

よく知られているように，パーソナリティの生物学的基礎である体質と気質の関連については，クレッチマー，シェルドンなど多数の研究がなされている。

更に，それらの表出である“筆跡と体質”の関係についても，クレッチマー，エンケ，シュタインバックス等の先行研究が知られている。彼等の筆圧曲線の研究等については著者も興味をもっていた。

併し，そのような“体質，気質と筆跡”のかなり顕著な関連に気付いたのは SCT を読んでいる時である。S・Z・Eそれぞれのタイプの人にはそれぞれ共通した筆跡特徴があるということである。しかも，その特徴がいかにもそれぞれの体質・気質にマッチしている。そこで，いつしか，それを診断の補助手段に使用するようになり，また，評価のトレーニングにも用いるようになった。そして，これが受講生にもかなりよく理解された。ということは，それが公共的事実だということである。30年も前のことである。

そして，この関係を実験的に裏付けるべく研究をはじめたのは，10数年前になろうか。その成果は「SCT 筆跡による性格の診断」として金子書房より出版された。

●NO. 26 は，それ以降の研究を加えたものである。

以後の研究で特筆することは「仮名１文字」について研究した点であろう。これは現在も継続中であるが，著者が以前に行った「文章」による研究と基本的に同じ結果が得られたことは今後の研究の進歩に有力な武器となろう。

（槇田　仁）

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ
組織行動研究（第17号）
責任編集　槇田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND HUMAN PERFORMANCE No. 17
APRIL 1990

発行　〒108 東京都港区三田2—15—45
慶應義塾大学産業研究所
電話 03—(453)—5640(直通)
＜平成2年4月30日＞

印刷　〒104 東京都中央区八丁堀3-21-3
株式会社国際印刷
電話 03—(553)—2051(代表)
＜平成2年4月23日＞